# 早稲田大学審査学位論文（博士）の要旨

## 題名「モーリッツ・ガイガーの現象学と美学」

峯尾　幸之介

### はじめに

本論は、モーリッツ・ガイガー（Moritz Geiger, 1880–1937）の現象学と美学を主題として、第一に、かれの思想の全体像を描き出すこと、第二に、かれが美的価値の客観性を、どのように現象学的に根拠づけ、そうすることが、どのような美学的な意義をもつのか、ということを解明することを目的とするものである。この要旨においては、各章の内容を要約していく。

### 第１章　哲学史における位置づけ：マッハの要素一元論とフッサールの現象学

第１章においては、ガイガーの論文「アレクサンダー・プフェンダーの方法的姿勢」（1933 年）をもとに、かれがどのようにマッハ（Ernst Mach, 1838–1916）の要素一元論を批判し、フッサール（Edmund Husserl, 1859–1938）の現象学を受容したのかということを確認しながら、かれの現象学を特徴づけた。

マッハも現象学も、わたしたちにそれ自身として与えられているものから出発しようとするという点においては一致しているものの、ガイガーは、マッハが感覚主義的、観念論的な先入見にとらわれ、感覚だけしか自己所与性として承認しなかったことを批判している。わたしたちには、感覚だけに限定されない、多様で豊富なものがそれ自身として与えられているのであり、ガイガーは、現象学の原理が、まさにフッサールが理念的なものをそのような自己所与性のひとつとして承認したように、多様で豊富な自己所与性を承認すること、すなわち、「最大限の所与性の承認」のうちにあると主張するのである。現象学は、それ自身として与えられているものを、与えられるがままに記述するのであり、そのさい、「存在者を必要以上に多数化してはならない」といういわゆるオッカムの剃刀とは反対のこと、つまり、「存在者を必要以上に少数化してはならない」ということがその原理となる。

ガイガーはフッサールの現象学的方法のうち、本質直観と「客観への転回」なるものを重視する。本質直観はフッサールが規定しているとおりのものであるが、ガイガーは、プフェンダー（Alexander Pfänder, 1870–1941）が採用した本質の類比的記述をも現象学的方法のひとつとして採用するべきであるとも主張している。フッサールは『論理学研究』第１巻において、論理学における心理学主義を批判して、実在的なものと理念的なものとの差異を主張しているが、ガイガ

ーは、それらの差異よりもむしろ、心理的なものと対象的なものとの差異を強調し、現象学の可能性は、対象を心理的なものに還元することなしに分析する「客観への転回」のうちにこそあると主張するのである。かれはそれを、対象よりも意識の分析に取り組んでいったフッサールの「主観的なもののうちへの転回」と対比している。ガイガーは、わたしたちが以上のような現象学的方法を実践するさいには、フッサールがとったような超越論的態度ではなく、わたしたちが日常生活においてとっているような直接的態度をとることが必要であることを示唆している。

## 第２章　直接的態度の現象学と実在論

上述の直接的態度がどのようなものであり、この態度をとることに、どのような根拠と意味があるのかということを確認したのが第２章である。

ガイガーは著書『諸科学の現実と形而上学』（1930 年）において、物理学のような個別科学にとっての現実（構造存在系）やその認識を形而上学的なものとして絶対化しようとする科学主義を批判している。物理学的な現実はさまざまあるうちのひとつであるにすぎないにもかかわらず、科学主義はそれを唯一のものとして絶対化してしまうのである。そのようなさまざまな現実は、わたしたちがそれぞれ異なる態度をとることによって開かれるものであり、ガイガーは、わたしたちがとりうる態度を、精密自然科学の研究者がとっているような自然主義的態度と、わたしたちが日常生活においてとっているような直接的態度に区別する。自然主義的態度の特徴は、第一に、すべてを物理的なものとして説明しようとすること、第二に、物理的＝客観的なものとして説明できないものすべてをたんなる心理的＝主観的なものとして説明しようとすることにある。それに対して、直接的態度の特徴は、第一に、〈物理的＝客観的〉および〈心理的＝主観的〉という等式が通用しないこと、第二に、物理的なものに限定されない、豊かな客観領界が開かれるということにある。たとえば、数は、自然主義的態度においては、物理的＝客観的には存在しない、心理的＝主観的なものとして規定されるのに対して、直接的態度においては、物理的でも心理的でもない、理念的な客観として規定されるのである。このように、異なる現実が異なる態度をとることによって開かれるのであるから、研究者はみずからの従事する分野とその現実に対応する十全的な態度を、たとえば、数学者は、自然主義的態度ではなく、直接的態度をとらなければならないのである。

ガイガーは、さらに、直接的態度の内部に三つの異なる態勢があると指摘し、そのうち、主観にとってなにが、いかにして与えられるのかということに関心をもつ所与性の態勢にもとづくのが現象学にほかならないと主張する。所与性の態勢とそれにもとづく純粋現象学は形而上学的に中立的であるものの、ガイガーは、フッサールの構成的現象学を、所与性の態勢を形而上学的に絶対化した超越的な観念論であると批判する。それに対して、ガイガー自身は、所与性の態勢をはなれるものの、直接的態度の内部にとどまって、この態度をとることによって開かれる現実の実在性を承認する、つまり、内在的な実在論の立場をとるのである。

## 第３章　心理的なものの実在論

ガイガーは論文「無意識の概念と心理的実在にかんする断章」（1921 年）において、上述の直接的態度の実在論にもとづいて、内在的心理的実在論ないし実在心理学を展開している。この第３章においては、かれが直接的態度の実在論の立場をとったことの意味を、その実在心理学にそくして、解明した。

かれは自我や意志のような心理的なものを意識体験の連続に還元しようとする体験心理学を批判する。これは自然主義的態度とそれにもとづく唯物論や並行論にとって好都合なかたちで、心理的なものをたんなる体験として形而上学的に無価値化するのである。体験心理学が意識体験を形容詞的に把握するのに対して、ガイガーは、それを動詞的に把握するべきであり、心理的なものの内部における体験されるものとそれを体験するはたらきの差異、すなわち、心理的なものの二層性を承認するべきであると主張する。たとえば、体験心理学において、意志とは意志体験にほかならないのに対して、実在心理学において、意志とは体験されるものであって、それを体験するはたらきとしての覚知とは区別されるのである。

ガイガーは心理的なものの実在性を、意志を例に挙げながら、つぎのふたつの根拠をもとに主張する。第一に、わたしたちがみずからの意志――意志定立ではなく意志する振舞い――を、体験することはできるが、体験していないあいだも存在するものとして、つまり、意識体験に依存しない実在として体験しているということ、第二に、意志を、体験心理学が匿名的で無力な体験として無価値化してしまうのとはちがって、自我という中心をもち、べつの心理的行為や身体的行為を動機づける力をもつ、そのような意味において力動性をもつものとして体験しているということである。わたしたちは、このような実在心理学の立場をとり、心理的なものの実在性を承認することによって、たとえば、自由な意志や責任というものを、倫理的、法的に問題にすることができるのである。以上のことに、直接的態度の実在論、それにもとづく実在心理学の立場をとることの意味のひとつがあると結論づけた。

## 第４章　美学史における位置づけ：絶対主義的美学と相対主義的美学

第４章においては、ガイガーによる価値美学の構想、従来の美学における絶対主義と相対主義の批判、自律的な価値美学の構想における現象学的方法の重要性を確認した。

かれは美学を価値学、「美的価値の形式と法則についての学問」であると定義するが、美的価値を研究することには、美的価値の相対性という困難がある。そのため、心理学的美学は事実学として、美的価値を回避し、美的体験という心理的な事実だけを研究しようとしてきた。しかし、もしわたしたちが美学や美術史の研究に従事しようとするならば、どうしても美的価値の本質や美的価値以外のものとの差異を解明しなければならないのである。

ガイガーは、従来の美学における絶対主義と相対主義の相克を検討していく。一方で、プラトンの形而上学的美学のような絶対主義的美学は、美的価値とその絶対性を、イデアという形而上学的存在のような美的価値以外のものとその絶対性によって他律的に根拠づけようとしてきた。しかし、美的価値とはどのようなものであり、それは絶対性をもつのかということは、美的価値そのものにそくして研究しなければならない。他方で、リップス（Theodor Lipps, 1851–1914）の

心理学的美学のような相対主義的美学は、上述のように美的価値を回避し、それを感情や評価のような心理的事実へと還元しようとしてきた。しかし、それは美的価値の相対性を補強しているのにすぎないのであって、証明してはいないのである。

ガイガーは、自律的な個別科学として美的価値を研究する美学を構想するのであるが、そのような美学こそが、現象学的方法の主要な応用分野であると主張する。美的価値は、実在ではなく、現象としての対象に帰属するのであるが、現象学とは、そのような現象のもとに立ち止まり、その本質を直観によって把捉しようとする方法であるからである。ただし、ガイガーは美的価値の構成の問題を、現象学的美学ではなく、哲学的美学の課題として位置づけている。

## 第５章　美的価値論

価値美学にとって直接的態度における現象学がどのような意味をもち、ガイガー自身がそれにもとづいて、どのような美的価値論を展開し、どのように美的価値の絶対性ないし相対性の問題に決着をつけたのかということについて論究したのが第５章である。

心理学的美学は美的価値を心理的事実へと還元しようとするのであったが、わたしたちは、直接的態度をとるかぎりにおいて、美的価値をそのようなものとして体験することはない。ガイガーは、自然主義的態度における主観性と客観性の意味と直接的態度におけるそれらの意味との差異を重視する。自然主義的態度におけるのとはちがって、直接的態度においては、主観的なものとは主観や主観に帰属するものとして体験されるものとして、客観的なものとは客観や客観に帰属するものとして体験されるものとして、言い換えれば、眼前に見出されるものとして規定される。美は、自然主義的態度においてはたんなる心理的＝主観的なものとして規定されるのに対して、直接的態度においてはそうではない。なぜなら、わたしがある対象を美しいとおもうとき、わたしはその美を、けっしてみずからの美しさとして体験するのではなく、その対象の美しさとして、そのような意味において「現象学的客観性」をもつものとして体験するからである。この現象学的客観性とは対象的なものとして与えられるという意味での客観性であって、絶対的に妥当するという意味での客観性ではないことには注意が必要である。もちろん、美的価値を主観のうちに起源をもつものとして心理学的に説明することもできるだろうが、美的価値を心理的事実ではなく美的価値として現象学的に分析するさいには、そのような発生的問題を遮断しなければならないのである。

このような直接的態度における現象学とそれにもとづく主観性と客観性の意味の解明が、ガイガーの美的価値論のうち、積極的な価値の分析において真価を発揮している。積極的な価値とは、ギリシャ彫刻のうちに見出される力強さのような生の契機、夕焼けのうちに見出される物悲しさのような心の契機であり、かれはこれらの契機を美的対象の本質、美的世界の核心として非常に重視している。この美的価値論はリップスの美学を踏襲したものであるが、リップスがそうした契機を自我の感入の所産、つまり、自我が対象のうちへと客観化したみずからの活動や感情にほかならないと説明したのに対して、ガイガーはそれを批判して、とくに心の契機＝感情性格について、その与えられ方の特徴、感情の与えられ方との差異を記述しようとする。ガイガーは、わたし自身の明朗さのような感情とある風景の明朗さのような感情性格、それらの与えられ方の差異を、ある実験によって証拠づけながら、つぎのように記述する。第一に、感情と感情性格

は、自然主義的態度においては、いずれもたんなる主観的なものとして規定されるが、直接的態度をとるかぎりにおいて、感情は主観に帰属するものとして体験されるのに対して、感情性格は眼前に見出されるものとして、すなわち、現象学的客観性をもつものとして体験される。そうであるからこそ、第二に、感情は、それに注意をむけようとすると消滅していくという意味において明晰さを欠くのに対して、感情性格は、注意をむければむけるほど際立ってくるという意味において明晰さをもつのである。この心の契機＝感情性格は、模倣芸術においては、描写される内容ばかりではなく、描写の仕方にも宿るのであり、しかも、その芸術作品の価値としては、描写される内容に宿る契機が価値中立的であるのに対して、描写の仕方に宿る契機こそが重要である。このことは、美的体験論において重要性をもつことになる。

それでは、このような美的価値は絶対性をもつのか、あるいは、相対性をもつのか。ガイガーは、たしかに個々の美的価値が相対性をもつ、つまり、個々の対象が美的価値をもつかどうかは相対的であることをみとめながらも、わたしたちが美術史家や批評家として美的対象を評価するさい、一般的な美的価値の絶対性を前提しているという事実に注目する。わたしたちは、たとえば、文学作品を評価するさい、一般に、優れた心理学的性格描写が美的価値をもつということを前提しているのである。そのため、ガイガーは最終的に、個々の美的価値ではなく、そのような一般的な美的価値の絶対性、ただし、価値同士が相互に対立することがあるため、それとともに、その多元性を主張するというかたちで、絶対主義かつ多元論の立場をとるのである。

## 第６章　美的体験論

ガイガーは、価値美学の立場のもとで、美的価値の研究をもっとも重視しているものの、美的体験の研究についても、美的価値を研究するさいにとるべき十全的な態度と美的価値体験がもつ意義を解明するためのものとして重視している。この第６章においては、美的な体験と非美的な体験の差異を問題にするかれの美的享受論と、正当な美的体験と不当な美的体験の差異、正当な美的体験がもつ実存的意義を問題にする美的価値体験論について論究した。

かれはその美的享受論において、まず、享受一般の本質を喜びと対比するかたちで解明し、つぎに、享受のうち美的享受の本質を非美的享受と対比するかたちで解明している。ガイガーは、享受一般の本質契機を、喜びが動機づけられているのに対して、無動機的であるということなどのうちに見出したうえで、美的享受の本質を「対象の豊かで充たされたありさまの利害関心にとらわれない観照のうちでの享受」として定義している。観照とは、自我と対象の隔置を、対象の豊かで充たされたありさまの観照とは、対象が〈なんであるか〉ではなく、それが〈いかに与えられるか〉ということに関心をもって観照することを、利害関心にとらわれない観照とは、対象を自己にたいする関係ゆえにではなく、そのものの本性ゆえに関心をもって観照することを意味する。ただし、ガイガーは享受という体験の仕方を美的価値の体験としては低く評価している。なぜなら、適意という体験の仕方が価値把捉であるのに対して、享受は、結局のところは、たんなる自己享受であるにすぎないからである。その一方で、美的享受こそが美的なものの最終目標であるとも主張している。それは、あくまで享受が上述のような美的享受として美的価値を把捉するかぎりにおいてのことである。ただし、この美的享受論においては、それが美的価値の体験であるかどうかではなく、ただ体験の仕方が美的であるか非美的であるかだけが問題になって

いた。

ガイガーは美的享受論以外においては、美的体験を、あくまで美的価値の体験として定義し、美的価値の体験の正当・不当の差異を問題にする。かれは美的価値の不当な体験として、四種のディレッタンティズムを批判するのであるが、そのなかでもとくに、内方集中におけるディレッタンティズムを批判する。これは、美的対象を目の前にして、それによって産出されるみずからの気分や感情にのみ集中するような体験を意味している。それに対して、ガイガーは、美的対象そのものに集中するような外方集中こそが、美的価値の正当な体験であると主張するのである。

それでは、わたしたちが美的価値をそのような不当な仕方において体験するのではなく、正当な仕方において体験することには、どのような意義があるのだろうか。これにかんしては、第５章において取り上げた積極的価値の体験に注目した。積極的価値は、模倣芸術においては、描写される内容ばかりではなく、描写の仕方にも宿るのであったが、ガイガーは描写の仕方を芸術的把握と、そこに宿る積極的価値の体験を芸術的人格の価値の体験とも言い換えている。わたしたちは芸術作品の体験において、ものごとを、わたしたちの日常的な態度、利害関心にとらわれたありかたにおいて体験するのではなく、芸術家がとるような芸術的な態度、利害関心にとらわれないありかたにおいて「寛大、真剣、高貴なしかたで見、感じ、体験する」のである。ガイガーはそのような体験を念頭におきながら、真正の芸術作品に固有な効果を深層効果のうちに見出す。かれはわたしたちの自我を生命的、経験的、実存的自我という三つの層に区分し、真正の芸術作品は、自我の生命的な表層を刺激し、快楽をもたらすにすぎない表層効果ばかりでなく、実存的な深層を感動させ、幸福にさせるほどの深層効果をもたなければならないと主張するのである。この深層効果は、わたしたちが内方集中するのではなく、その芸術作品そのものにたいして外方集中することによってこそもたらされるものである。ガイガーは最終的に、真正の美的・芸術的体験を「実存的で質的な静観」、それにおける脱現実化と現実化のうちに見出す。わたしたちは、対象を静観することによって、自己への関心からはなれ、その対象を孤立化するのであり（脱現実化）、そうすることによって、その対象がわたしたちにとってどのようなものであり、どのような意味をもつのかということを、日常生活におけるよりもいっそうありありと、いっそう深く体験することになるのである（現実化）。

## おわりに

以上が要約である。結論においては、ガイガーの思想の全体を振り返ったうえで、かれの現象学的美学を批評し、将来の現象学的美学の可能性を素描した。ガイガーは、わたしたちが美や芸術作品を、内方集中のような不当な仕方ではなく、外方集中のような正当な仕方において体験しなければならないということを、いわば外的な要求として主張したのに対して、本論としては、むしろ、わたしたちが内方集中的体験の重視から、外方集中的体験の重視への移行を、内的な変化として経験していることを指摘し、ガイガーとは反対に、あえて方法的に享受美学という道を進むことにこそ、現象学的美学の可能性があると主張した。